

血族のバスケット

黒気刃

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて全中で活躍したキセキの世代

だが、彼らは決して真摯ではなかった。彼らの目に余る行為で身内を傷つけられたとある一族は、キセキの世代を潰すために動き出す……

目次

プログラグ

1

プロローグ

ダムツ。キュツ。

小気味のいい音が体育館から聞こえてくる。中を見ると、男子高校生達が汗を流しながら、バスケの練習をしていた。

ここは神しん閨あん高校。長野県にある今年創設された新設校で、彼らは、神閨高校にてバスケット部を結成したときの最初の部員だ。バスやドリブル、シユートや連携、速攻などといったバスケの基礎技術から、走り込みや筋トレなどの肉体を鍛える練習までみっちり行っており、かなり体力を消耗していた。

「よし、一度休憩だ」

200cmほどの長身を持つ主将の少年の言葉で、部員達は練習の手を止める。それから、体育館の端に置いてあるタオルやドリンクを取りに向かう。その様子を一瞥してから、主将は自身のタオルやドリンクが置かれている場所に向かう。

彼の名は空山そらやましん仁。ポジションはPFであり、部員達の合意で主将になった。

「とりあえず、結構いい感じじゃねえか？」

「思いの外あっさりここまで来たし、バスケも案外簡単だな」

「馬鹿野郎。あいつらをぶっ潰す気なら、いくらやっても足りねえよ」

部員達の軽口を空山はたしなめる。空山の言葉を聞いて、部員達は目を細める。

去年は絶対王者帝光^{ていこう}中学校が三連覇を達成した年だ。帝光中には『キセキの世代』と呼ばれる五人の天才がおり、彼らは圧倒的な力で三連覇を成し遂げ、バスケ界はもちろん外部からも注目を集めた。プロバスケットボールプレイヤー達は彼らに大きな期待を寄せる一方で、自分達も食われるのではないかという恐怖心も抱いている。また日本のバスケ界が有名になることを期待している声もある。

だが、その一方で、彼らは数多くの犠牲も生み出した。あまりに圧倒的な力を有するが故に、真摯にバスケをやることをせず、対戦相手の精神をことごとくへし折ったのだ。そのため、彼らを恨んでいる者も多い。

空木達もその口だ。キセキの世代を倒す。彼らはそのために新設校にバスケ部を創り、日々練習を積んでいる。

ちなみに新設校に行った理由は四つある。一つ目は強豪校などに行くと、熾烈なレ

ギユラー争いがあり、今までバスケットをしたことがない自分達がそれに打ち勝てるとはとても思えないこと。二つ目は仮にごく一部が打ち勝てても、全員が試合に出なければ何の意味もないこと。そして、三つ目が神閥高校は彼らの親族が経営している学校のため、ある程度自由がきくこと。在籍している生徒達もよく知った者たちのみのため、下手な邪魔が入ることもおそらくない。弱小校に行くことも考えたが、やはりこちらの方が圧倒的に自由がきく。そして何よりも大事な四つ目は、これは制裁だということだ。それを行うのならば、神閥こごでなくてはならない。

「まあ、上からのご命令だ。俺たちに逆らったことがどういうことを意味するかあいつらに思い知らせてやろうぜ」

空山はニヤリと笑った。その手にはインターハイのトーナメント表が握られていた。彼らの一回戦の相手は東京三大王者の一つ泉真館せんしんかん。だが、泉真館には興味がなかった。ここにはキセキの世代を擁する四つの高校がある。それを潰すことだけしか、彼らの頭にはなかった。